

[コメント1]

都市文化創造における ハンブルク工芸博物館の役割について

エバ カミンスキ
Eva Kaminski
(ハンブルク大学)

それぞれの国家や地域のもつ文化的背景とは別に、日本でもドイツでもそうですが、都市のひとつの重要な要素が、その歴史にあることは言うまでもありません。しかしながら、歴史遺産にどう取り組むのかは、それぞれの文化によって自ずと異なってきます。今から私は、ハンブルクを例にとってお話ししますが、これはドイツの他の地域にも敷衍できると考えています。

歴史遺産が保存される場所のひとつに博物館があります。私は、ここでドイツの工芸博物館のひとつであるハンブルク工芸博物館について述べますが、こうした博物館を私は、歴史遺産の保存の場所であり、また同時に都市文化創造において積極的な役割を果たす場所であると位置づけています。

では、ハンブルクにおいてこうした博物館はどのように今日まで発展してきたのでしょうか。まず、その歴史をたどりながら、現在まで続く特徴を述べてみたいと思います。

ハンブルク工芸博物館には、まさに都市の産物という言葉がぴったりします。というのは、これは、主に市民たちの工芸への関心に基づいて、日常文化の一部として、ドイツ屈指の大都市に成立したからです。これには商工業を営む市民層の関心が大きく寄与していました。彼らは、19世紀には多くの私的なコレクションを集め、ここから後に創られる工芸博物館の基礎が成立します(註1)。これは何もハンブルクに限ったことでなく、ドイツ

他の都市にもみられたことですが、市民の広範な社会層の積極的な参加は、工芸協会の設立と、これに続く工芸博物館の設立にとって決定的な役割を果たしました。

バルバラ・ムント (Barbara Mundt) は、次のように述べています。すなわち、「工芸博物館の創設と振興に尽力した者たちのグループのなかに、産業界の代表者として、たいはい多くの工場主たちがいた。しかしその中には、しばしば中小企業の経営者たちや、あらゆる分野の商人たち、金細工職人からパン職人に至るまでの手工業の親方たちをみてとることができるのである」と述べているのです。(註2)

この 1877 年に建てられたハンブルク工芸博物館の目的は、同時期に建設された他のドイツの工芸博物館と同様に、まずは「工芸」の促進にありました。そこには、歴史は、歴史遺産として集められた物を基盤として伝えられるのであり、その過去からの積み重ねによって、さらに新しいものが作り出されていくという考えがあったといえます。そして、同時に工芸博物館は、ハンブルク工芸博物館の初代館長であったユストゥス・ブリンクマン (Justus Brinckmann) がとりわけ強調したように、市民の美学的な感覚の形成に、また工芸品の買い手と生産者の審美眼の向上にも役立つものでした。(註3)

たとえば工芸家たちは、その展示の中に自分の作品のモデルを見出し、さらに講演やワークショップを通じて、さまざまな新しい技術的・美学的な成果に関する情報を入手することができました(註4)。これは、今なお続いています。他方、コレクションもまた、特に工芸に関心を持つ市民たちや、工芸品を生産する人たちのために行われましたが、これも現在まで続いてきています。

つまり、この時代から、すべての市民に開かれた工芸博物館は、歴史遺産の保存と歴史の継承に寄与しつつ、同時に、市民の美学的な価値形成と美学的な教育に非常に大きな役割を果たしてきたといえるのです。そしてその一方で、工芸家たち、すなわち生産者にとって工芸博物館は、今日まで新しい刺激を得ることのでき、技術的にも芸術的にも高い水準の作品を作ることを可能とする場でありつづけてきました。このようにして、博物館の展示品は、広範な社会階層の人々を獲得し、その日常生活に影響を与え、過去と現在への関心を育ててきました(註5)。そして、この高まった関心が、博物館自身の活動をさらに活性化し、まずは博物館に関わる人々のなかに大きな変化を惹き起こしていくこととなりました。こうして育まれた大きな潜在力が、都市文化創造のプロセスに大きな影響をおよぼしていったのではないのでしょうか。

では、ハンブルクでは市民と博物館の相互関係は、具体的にどのように展開し、都市文化の発展を刻印づけているのでしょうか。そこでは並行して二つのことが進んでいます。

第一は、博物館が市民のために博物館所有のコレクションを展示することによって、都市文化の中における、研究機関、成人教育機関、余暇を過ごす場所としての機能を果たしていることです。

第二は、市民たち自身が、博物館内部の多くの仕事を引き受けることで、彼らの時間とその有能な専門的知識を博物館に提供していることです。さらに市民たちによる財政的な支援もまた、コレクションを広げ、新しい展示室を設け、博物館をより魅力的なものとすることに貢献しています。その一例は、シューマン氏の寄付によって建てられた新しい建物による館の増築です。

市民たちは、博物館の学芸員との直接的な接触を通して博物館活動に価値ある貢献をしており、このことが博物館をよりよいものにしているのです。ハンブルク大学の博物館学のゼミナールで示された報告に拠れば「ドイツにおいては、20,000人以上の住民がいる都市の州立博物館では、全体の17%がボランティアある」(註6)とあります。

では、現在のハンブルク工芸博物館はどのようになっているのでしょうか。現在の館長ウィルヘルム・ホルンボステル氏 (Prof. Dr. Wilhelm Hornbostel) のもとでアジアとヨーロッパの工芸部門は、時代的に分ければ、古代、中世、ルネサンス、バロック、古典主義、ユーゲントシュティール、現代の時代区分からなり、そして時代的範疇からは切り離されて、東アジア・イスラームに関する部局がひとつ設置されています。また、あらゆる部局を支える教育部もまた、ひとつのまとまりとして活動しています。

すでに述べましたように、ハンブルクの博物館は、コレクションを展示することで、歴史遺産の保存の場所としてだけでなく、市民たちに積極的に歴史を伝えるところとしても機能しています。すべての部局の学芸員たちは、コレクションの保存、編纂、展示、分析をし、さらにそこで得られた知識を伝えようとします。たとえば、展示以外に、定期的に行われる週末や夕べの公開講座、特定テーマに沿った案内、昼時に行われる小さな講座や案内、ゼミナール、ワークショップ、出版、博物館に保管されている歴史的な楽器を使ったコンサート、大学や芸術家との共同作業などです(註7)。その際、重要な役割を果たすのは、教育部です。ここでは、展示品に関する知識情報を伝える出版とともに、館内案内、ワークショップ、学習会なども実施します。主な対象となるのは、小学校から高校ま

での生徒たちであり、その藝術の時間を博物館が引き受けます。さらに大学生も対象となります。こうした若い世代が、やがて都市の文化活動における将来の担い手となっていくのです。このように博物館は、教育的機能を引き受け、歴史と歴史遺産の重要性に関する市民の意識を育てているのです。

それは、博物館が市民によって積極的に支持されているということの意味しています。そうした人々は、一方では、たとえば定年退職している芸術史家、図書館司書、工芸家等の専門家たちであり、他方では歴史や藝術に関心の高い市民たちです。彼らは、非常に早く必要な知識を身につけ、質の高い仕事をしています。このような自発的な市民の協力者たちは、どの部局にもみることができ、少なく見積もっても延べ 300 人に及んでいます(註 8)。その一例として、ハンブルク工芸博物館のなかにある図書室について紹介しましょう。この図書室は、従来、労働力の不足によって、一般市民のごくわずかのの人々にしか利用されていませんでした。しかし 2 年前から、定期的の開館しています。それは、さしあたり約 80 人のボランティアの市民が、仕事を分担し、交代制で本の貸し出しと、閲覧室の管理を引き受けているからです。こうして、図書室は、博物館の学術情報を市民に伝えるひとつの重要な場所となったのです。

博物館のなかでひとつの重要な組織は、ユストゥス・プリンクマン協会です。現在、ここには二人の専門職員がいます。そのうちの一人は、事務局長のフリーデリケ・ロイテル氏 (Friederike Reuter) です。この協会は、1877 年の博物館創設時にはすでに存在していたハンブルク工芸協会によって設立されました。ここには、当時すでに 900 人の会員がいました(註 9)。現在、会員は 4363 人ですが、そのうち 202 人がユストゥス・プリンクマン協会と博物館を財政的に支援しています(註 10)。ユストゥス・プリンクマン協会の会員は、すでに述べましたように、博物館の運営に積極的に関与し、財政的支援を通して新しい工芸品と、ゲルト・ブチェリウス (Gerd-Bucerius) 図書室の設備品にみられるように室内調度を購入しているのです(註 11)。この協会は、まさに市民と博物館の接点であると言っていいでしょう。

もちろん、このような市民の活動は、市民と博物館の双方にとって実りあるものとなっていますが、しかしながら同時に、こうしたやり方でハンブルク市が、文化を支え、発展させていくという自らの使命を市民たちに肩代わりさせることも可能なのだという面を忘れてはならないでしょう。

私は、ハンブルク工芸博物館の状況について、簡単に述べてきました。では、日本においてはどのようなのでしょうか。残念ながら開発によって、都市でも農村でも多くの自然や歴史遺産を破壊しているこの国では、それゆえに博物館は、歴史遺産の保存と歴史の継承の場所として、おそらくドイツに負けず劣らず重要な役割を果たすのではないのでしょうか。たとえば、ハンブルクと比較されうる大阪（姉妹都市です）はどのようなのでしょうか。ここでは博物館は、都市文化形成の重要な担い手として、市民の間に浸透しているのでしょうか。そのような問いを発することで、私の話を終えたいと思います。

註

- (1) ドイツ工芸博物館創設における市民の役割に関しては、Mundt (1974), pp. 49, 50. ここでは、B.ムントの研究(1974)の研究に大きく依拠している。今日までこれは、19世紀のドイツ工芸博物館に関する最も詳細な研究であり、この分野の基本文献とみなされている。
- (2) Ibid., p. 60
- (3) Ibid., p. 23
- (4) Ibid., p.11
- (5) 1879 年以来ハンブルク工芸博物館は、毎年、北ドイツ工芸のメッセを開催している。1949 年からは、これは、ユストゥス・ブリンクマン(Justus Brinckmann)協会によって担われている。Cf.Reuter (2002). これは、クリスマス前夜に開催され、工芸に関心のある多くの市民が訪問している。
- (6) Ritze / Lorch (2002).著者によれば、この数字は、1992 年のドイツ全国都市会議で行われた連邦共和国の博物館調査に基づいている。Ibid., p. 1
- (7) 博物館の活動は、次のサイトから見るができる。 <http://www.mkg-hamburg.de>
- (8) 残念ながらこの数字は、常に変化するため正確に示すことはできない。300 人という数字は、2002 年のユストゥス・ブリンクマン協会の事務局長報告に拠っている。Cf. Reuter (2002), p. 2. 著者に拠れば、ボランティアの圧倒的多数は、ユストゥス・ブリンクマン協会の会員である。しかし、ボランティア活動は、この協会の加盟要件ではない。

(9) Cf. Reuter (2002), p. 1

(10) Ibid., p. 2

(11) Ibid., p. 3

参考文献

Mundt, Barbara: Die deutschen Kunstgewerbemuseen im 19. Jahrhundert. München
1974.

Museum für Kunst und Gewerbe (Hrsg.): Handbuch. Prestel, Hamburg 1980

Reuter, Friederike: Entwicklung der fördernden Vereinigungen für das Museum für
Kunst und Gewerbe. Hamburg 2002 (未刊行資料)

Ritze, Stephanie / Lorch, Gerlind-Anicia: Ehrenamtliche und ihre Rolle im
Museumsbetrieb. Hamburg 2002 (未刊行資料)

Saldern, Axel von: Das Museum für Kunst und Gewerbe Hamburg, 1869-1988. Hamburg
1988

Wagner, Bernd: Ehrenamt, Freiwilligenarbeit und bürgerschaftliches Engagement in der
Kultur. Dokumentation eines Forschungsprojektes. Essen 2000

Wagner, Bernd: Engagiert für Kultur. Beispiele ehrenamtlicher Arbeit im Kulturbereich.
Bonn 2003